

# 2017年西洋中世学会第9回大会

## 自由論題報告要旨集

### 1 星野倫 Hitoshi HOSHINO

天国と政治——ダンテ『帝政論』と『神曲』〈天国篇〉——

Paradise and Politics: Dante's *Monarchia* and *Paradiso*

ダンテのラテン語政治論 *Monarchia* (『帝政論』3巻)の成立年代については長年議論されてきたが、1965年のRicciによる校訂版が「『神曲』の〈天国篇〉で既に私が述べたとおり」(*Mon. I, xii, 6*)という挿入句を本文として採用して以来、〈天国篇〉執筆時期と同時期またはそれ以降に完成したとする立場が優勢になった。それに対し、とりわけここ10年の間に、様々な異論が提出されている。しかし、Ricciおよび彼を継承するShawの文献学的作業は手堅く、他方、ダンテの論理的・哲学的・政治神学的な変遷の実態を見ても、〈天国篇〉と『帝政論』がきわめて近い時期に執筆されたとする仮説は十分な説得力を有する。

この仮説を受けいれるとすれば、従来『神曲』をめぐる語りされてきた、『神曲』とは〈神学〉のアレゴリーとしてのベアトリーチェに到達せんとするダンテの歩みを描いた作品である、とか、『帝政論』で強調された教皇権と皇帝権の自立性という考えは『神曲』では神学の絶対的優位性に置き換えられている、といった考え方には大いに留保が必要となろう。実際、〈天国篇〉で同時代教皇たちへの罵倒はいっそう激しさを増し、一方、ローマ皇帝への賛美は強まって、木星天の光明たちは *Monarchia* の M の形 (そして鷲の形) を描いてダンテを迎える。ダンテが神学に敬意を払っていることは間違いないが、同時に、地上の幸福をもたらす政治権力としての役割を期待しているのは教皇ではなく皇帝なのである。

だが、ここでの最大の疑問は、フィレンツェでグェルフィ白派として積極的な政治活動に参加したダンテが、かくも明確なギベリーニ主義に立場変更することはいかにして可能か、という問題である。ダンテの皇帝主義は一個人としての皇帝を崇拜したりその専制を擁護するものではなく、個別下位政体(王

国、君主国、都市など) 同士の対立抗争を調停する上位審級として普遍的政治装置、帝政を要請するものである。そして実は、1300年にダンテがフィレンツェのプリオーレとしてしたことは、自らの党派利害を代表することではなく、まさにこの上位審級としての調停行為だった。ダンテは対立するゲルフィ白黒両派の代表者を等しく追放に処したのである。これは構造的に彼の皇帝主義と同型である。

ダンテの求めたのは一貫して、平和の調停者としての超越的権力だったと言えるだろう。フィレンツェ市内での白黒闘争、諸コムーネ間の抗争、さらに教皇庁および諸王国の織りなす複雑な国際政治、それらすべてが、常態化した対立抗争にまみれている。〈天国篇〉第22歌151行で恒星天から遠く地球を見下ろしてダンテは「L' aiuola che ci fa tanto feroci」(あのちっぽけな土地——それが我々をかくも残忍にする——)と歌う。『帝政論』末尾、第3巻16章11節でダンテが皇帝の任務として割りふるのはまさに、「in areola ista mortalium libere cum pace vivatur」(人間たちのこのちっぽけな土地で自由に平和のうちに生が営まれるよう)配慮を尽くすことなのである。

---

## 2 安藤さやか Sayaka ANDO

《コルビー詩編》の「生命の泉」——カロリング朝美術に於ける図像と装飾に関する試論——

“Fountain of Life” in the *Corbie Psalter*: A Study of Imagery and Ornamentation in the Carolingian Art

カロリング朝の〈Renaissance〉あるいは〈Renovatio〉と呼ばれる、皇帝の主導により推進された文化復興運動が最盛期を迎えていた9世紀初頭、美術に於いてもカール大帝の宮廷を中心として、古代への憧憬を示す新たな絵画芸術が開花していた。カロリング朝美術に関する従来の研究は、宮廷周辺の芸術に見られるこの古代復興という点に重心を置いていた。これに対し本発表は、この時代にコルビー修道院で制作された1点の写本《コルビー詩編》(アミアン市立図書館、Ms. 18)のイニシアルに於ける図像と装飾との融合過程を観察することで、カロリング朝美術の異なる特質の一端を明らかにするものである。

本写本では、詩編やカンテイクムの各編冒頭を飾るイニシアルに於いて、古代末期やビザンティン世界に由来する図像と、インスラー（島嶼）やメロヴィング朝の写本から継承した多様な装飾語彙とが共存している。テキストの内容を文字のうちに絵画化する「物語イニシアル」の中には、図像の主題についての解釈が分かれているものがあり、中でも聖母マリアのカンテイクムのイニシアル M には、「受胎告知」（PÄCHT 1963）或いは「訪問」（BRAUNFELS 1968; KAHSNITZ 2004）の特殊な例とする説や、「聖墳墓参り」（KUDER 1993）と解釈する説がある。これらの先行研究は、このイニシアルがナラティブな物語場面を表すことを前提としている為に、既存の図像伝統からの逸脱や、テキストの内容からの乖離といったが説明されずに残されていた。発表者はこれに対して、本写本の物語イニシアルが新旧約聖書の特定の箇所を典拠とする説話的図像だけではなく、複数の典拠に基づきテキストの内容を示唆する象徴的図像を持つことを指摘し、この主題を象徴的な物語イニシアルとしての「生命の泉」と考える。

「生命の泉」は、『ヨハネによる黙示録』の「生命の水の川」や『詩編』の「泉を求める鹿」等に基づく、洗礼や魂の再生を寓意的に表す図像である。異教古代に端を発する装飾モチーフは、古代末期の石棺彫刻やカタコンベ、舗床モザイク等で、キリスト教の文脈に読み替えられた。カール大帝宮廷派写本に於いては、この図像は古代末期やビザンティンの作例を手本として、より複雑な図像へと変容する。個々のモチーフや他の幾つかのイニシアルに注目するならば、本写本の画家がこの図像を知っていたことは明らかであり、聖母マリアのカンテイクムのイニシアル M もまた、キリストの誕生を象徴する「生命の泉」と解釈できる。そしてこの図像生成の要因となったのは、先行するインスラーやメロヴィング朝の写本から踏襲した、文字装飾の伝統であった。

古代末期やビザンティン芸術に由来する図像世界を、ケルト＝ゲルマン系民族の文字装飾の伝統に倣って再解釈している《コルビー詩編》のイニシアルは、カロリング朝期の芸術が必ずしも古代の模倣に終始しなかったことを示しているのである。

シトー会修道院と小教区共同体の相互コミュニケーションー中世盛期のラインラントとフランケン事例から

## Mutual communications between the Cistercians and parish communities: a case of Rhineland and Franconia in the High Middle Ages

西方修道制は、世俗社会から物理的・精神的に距離をおきつつ、それとの関わり方を模索してきた。10世紀、世俗社会による干渉をはねのけ一大拠点を築いたのがクリュニー修道院であった。クリュニーは、司教権力を含む世俗社会から莫大な財産の寄進を受け、それと引き換えに代祷を行うことで『戒律』が求める生活リズムから乖離していった。そこには修道制と世俗社会の間に実りあるコミュニケーションが成立していたわけだが、激しい批判を引き起こすことにもなった。

シトー会は、クリュニー修道制を批判的に継承してベネディクトゥスの『戒律』に回帰しながら、修道制による世俗社会との関わり方を反省的かつ抜本的に再検討した。12世紀を通して修道会の形を整える中で、シトー会も世俗社会との関わり方をダイナミックに変容させていったことはよく知られている。単線的な修道制の歴史においては、この変容、つまり原初からの乖離は弛緩・墮落とみなされがちである。しかし、世俗社会とのコミュニケーションが密になり、シトー会士が農村・都市社会の形成に深く寄与する側面も無視できない。そして、その実態を具体的に描き出すことの方が、修道制の史的意義を浮き彫りにする上で実りが大きいのではないか。

1980年前後に、「理想と現実」という問題設定がシトー会研究で一世を風靡した。ここでは、シトー会に関連して非常に多岐に渡るトピックが扱われたが、個々の修道院がパトロナトゥス、あるいはインコルポラティオといった法的形式で影響力を行使していた小教区教会は等閑視された。その後バーマンらによる研究では、小教区教会のパトロナトゥスやインコルポラティオはあくまで修道院の収入源として理解された。しかし、私たちは修道士が小教区教会まで赴き、そこで長期間逗留していたことにもっと注目しなければならない。人が移動し滞在するところにはコミュニケーションが発生する。修道士が小教区司祭や小教区民と何かしらの交流を行い、場合によっては彼らに対して司牧を中心に多様な貢献をしていたことが想定されるためである。このことから、シトー会修道院と世俗社会の結節点として改めて小教区教会に着目する意義は大きい。本報告では、ドイツ王国西部～中部に分布する修道院を対象に、修道院による①既存の教会・礼拝堂の再建、②小教区教会新設と農村共同体の形成、そして③小教区教会と所領内教会施設の役割分担、の3点について具体的に比較検討する。主に用いる史料は各修道院に伝来する証書だが、そ

れに加えて修道会の総会決議録や慣習といった規範史料、奇跡譚などの叙述史料も可能な限り活用したい。

---

#### **4 Dr. Michael RABY**

Between Sleeping and Waking: Hypnagogia in Medieval Literature”

The early troubadour William IX, Duke of Aquitaine claimed to have composed his most famous poem while riding on horseback—asleep. The physiology of sleep was a topic of much philosophical interest in the late Middle Ages. Examples of sleep disorders, including somnambulance and somniloquy, presented natural philosophers with limit cases that forced them to refine their accounts of cognition. Some of the most complex medieval descriptions of sleep disturbances occurred in poetry. In this talk, I examine how poets such as William IX, Dante and Geoffrey Chaucer explored the hypnagogic space between waking and sleeping—a state that medieval French poets called *dorveille*, a portmanteau of *dormir* (“to sleep”) and *veiller* (“to wake”). These literary descriptions of waking sleep intersected with contemporary philosophical accounts in interesting ways and shine light on how medieval thinkers theorized the mechanisms of perception. They also afforded space to reflect on the phenomenology of writing, which was often described as a kind of waking sleep. This paper illuminates a literary tradition that represents a significant moment in what Jonathan Crary calls the “dense history” of sleep.